

特別賞

検証 現代中国の 経済政策決定

田中修氏



各国の政治や経済の動向をうかがう最も重要な資料は、何よりもその国の権力中枢から出される公的文献である。公的文献のシリーズの中から浮かび上がってくる変化の兆候を微細に読み取るという作業は、地域研究者であれば、まずはやらなければならぬ基本的な手順である。過去のエックス線写真を現在のものと比べてどこがどう変化しているのかをみて、病巣のありかを発見するという医師の診断作業にも似ている。

特に共産党一党支配の中国の場合には、党大会や常務委員会、中央委員会総会、中央経済工作会議などの重要会議でなされた決定を精細に読みこなし、その決定の背後にある政治、経済の現実と迫るといふ作業を省くわけにはいかない。しかし中国経済研究においては、意外にもこの作業が等閑視されている。中国経済研究といえば中国政府発表のマクロ経済統計を用いた数量分析が主流となっているが、それらはしばしば「視野狭窄」に陥っている。

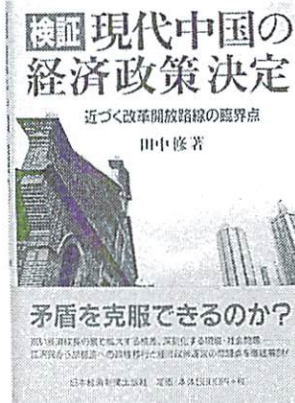
著者は江沢民と胡錦濤の二つの時代について膨大な党・政府文献を精力的に渉猟し、二つの時代の政策思想や金融・財政政策の変化を丹念に

1958年東京都生まれ。東京大学法学部卒業後、大蔵省に入省。96～2000年、在中国日本大使館経済部に勤務した。帰国後、財務省主計局主計官、信州大経済学部教授、内閣府参事官を務め07年7月から財務省財務総合政策研究所研究部長。

主な著書に「中国第十次五カ年計画—中国経済をどう読むか?」(蒼蒼社)、「中国経済のマクロ分析」(共著、日本経済新聞出版社)、「中国の経済構造改革」(共著、日本経済新聞出版社)など。

05～07年に内閣府経済社会総合研究所特別研究員。現在、財務総合政策研究所中国研究会委員、日中産学官交流機構特別研究員なども務める。

公的文献の変化読む



追い、それを細大漏らさず記述している。

旧ソ連邦や東欧諸国の採用した急進主義的改革とは対照的な中国の漸進主義的改革は中国の高成長を破綻なく展開させるのに貢献したものの、高成長の過程で浮上した多様な経済格差、資源・エネルギーの枯渇、環境破壊などには容易にその解消の道を探り当てることができず、その意味で中国は「改革開放の臨界点」に近づきつつあるという論理が、本書の基調に流れる。

在北京日本大使館に勤務して東京の外務省に毎日のように打電した報告書を再整理して構成されたものが本書である。扱われる時期は1996年から直近までの10年ほどであるが、この時期の中国経済を論じる場合、必ずや開かれねばならない必須の著作である。【評・渡辺利夫】